

主 題：啓示された神の知恵

聖書箇所：コリント人への手紙第一 2章6－16節

私たちは前回、福音宣教の鍵というものを学びました。我々がイエス・キリストの救いを伝える時、まず一つは福音に手を加えてはならない、正確に語りなさいということでした。決して人間的な方策、知恵でもって決心を導き出そうとしてはならないと。また二つ目に我々がみことばを語る時、聖霊なる神様の助けを仰ぎながら語りなさいと。私たちがどんなに人間の知恵による方策を講じたとしても、人は罪人を救いへと導くことができないからです。パウロはそのような人間の知恵ではなく、「神の知恵」を語ることを教えます。

きょう私たちが見て行く2：6－9でパウロはまず「神の知恵」について、次に10－11節では実はこの「神の知恵」というのは聖霊によって得たものであるということ、そして最後12－16節でこの「神の知恵」というのは、聖霊によって理解することが必要だと教えます。

A. 「神の知恵」 6－9節

1. 「知恵」を語り続けたパウロ 6a節

パウロは6節で「しかし私たちは、成人の間で、知恵を語ります。」と教えます。「成人」ということばを見ると「完成した」とか、「人間が十分に成長した」という意味があるので、ここで言われている「成人」は「霊的に成熟をした人」、「信仰的に成長した人」だと解釈するのもわかるのですが、恐らくパウロは、ここでは成熟度と関係なく、「福音を信じて救われた人」、「福音を信じて救いにあずかった人」のことを語っているように思えます。それには二つの理由があります。一つは文脈です。この中でパウロは、福音を信じて救われた人と福音を拒み続けているまだ救われていない人とを繰り返し対比しています。ですからここだけで急に信仰の成熟度の話をするとどうも文脈に合わないのです。もう一つの理由は、この「成人」ということばには「終わり」や「ある目的に達した」という意味があります。ですから恐らくパウロは、救いというその目的に達した人という意味で「成人」ということばを使っているのだと思います。確かに信仰の成熟度には違いがあります。信仰において成長した人もまだその過程にある人もいますが、信仰の成熟度と関係なく、パウロは「神の知恵」を語り続けたと言っているのです。

この「語ります」ということば、動詞の現在形で語っているのは彼がそれを継続して行い続けたからです。パウロはまだイエス・キリストの救いにあずかっていない人にも「神の知恵」、このすばらしい福音を語ったのです。イエス・キリストによって救いにあずかることを語りました。では救いにあずかった人にはどうか——。同じように「神の知恵」を語るのです。6節には私ではなくて「しかし私たちは」と書いてあります。これはパウロひとりの働きではなくてパウロたちの働きであり、そしてそれは当然私たち信仰にあずかった者たち、あなたや私もそこに含まれているのです。このすばらしい神様の真理というものを語り続けていく。それがなぜ大切かという、このみことばによって人々は成長していくからです。パウロはコロサイ1：28で「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。それは（理由です）、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」と言っています。ですから私たちはまだイエス様の救いにあずかっていない人に「神の知恵」を伝える責任があるのです。そしてその人が神の救いにあずかったならば、「神の知恵」を教え続けることによって、その人が信仰者として成長していくと。そしてパウロもパウロの同労者たちも同じことをしていたのです。あなたも私もそれを行いつけていくのです。

2. パウロが語り続けた「神の知恵」 6b－9節

二つ目に6節後半から9節を見ると、パウロが語り続けた「神の知恵」について記されています。

1) 人間の知恵ではない 6b節

6－7節「この知恵は、この世の知恵でもなく、この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵でもありません。私たちの語るのは、隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。」。まず、パウロは私の語った「神の知恵」というものはいったものではないのですと、自分の語った知恵と人々の知恵との違いを記すのです。

(1) 「この世の知恵」ではなかった

まず、彼が語ったのは「この世の知恵」ではないと言っています。「世」というのは「時代」という意味を持ったことばです。どの時代であっても、その時代、時代に住む人間の知恵を語ったのでもない。

(2) 「この世の過ぎ去っていく支配者たちの知恵」ではなかった

二つ目に「この世の過ぎ去って行く支配者たちの知恵」でもないと言っています。どんな強力な権力を保持していたとしても、彼らは永遠に存在するものではありません。「過ぎ去って行く」というのは「絶やす」や「滅ぼす」という意味です。現実どんな権力者も滅んでしまったのです。ですからパウロは、私の語っているのはそれがたとえ支配者であっても、そのように永遠に存在しない人々の知恵ではなく、永遠に存在されている方の知恵なのだと教えます。

2) 神の知恵である 7-9節

自分の語っている知恵と「この世の知恵」とが違うのだということを明らかにしたパウロは、今度は自分の語っている知恵、「神の知恵」とはどういうものであるかを説明していきます。

(1) 隠されていたもの 7節

7節の中に二つの説明があります。まず「隠された奥義としての神の知恵」であると書かれています。我々が前回見たように、かつては我々には隠されていたこと、知ることがなかったことを神は明らかにしてくださった。神による救いのご計画については人間は全くわからなかった。でも神はそれを明らかにされ、またさまざまな真理を私たちに明らかにしてくださった。ここにもありますが、神は私たちが全く知らなかったこと、悟ることができなかったことを憐れみをもって明らかにしてくださったのです。それを「啓示」と呼んでいます。神様が私たちに知らしめようとした大切な、大切な真理、パウロはそれを語っていると言うのです。

(2) 神が定めたもの 7節

二つ目に彼は「神の知恵」というのは神が「定め」たものであると言っています。7節「隠された奥義としての神の知恵であって、それは、神が、私たちの栄光のために、世界の始まる前から、あらかじめ定められたものです。」と。この神様が備えてくださったすばらしい祝福は、私たちが栄光へと導いていくものです。私たちは神様から罪の赦しをいただいた。我々が一生懸命努力をしたから救ってくださったのではなく、神は一方的にこの救いを下さったのです。罪が赦されて神の子どもとされ、私たちは地上を生きることができる。でもそれで死んでしまっただけで終わりかという、決してそうではない。私たちは栄光の主にお会いするし、その栄光の主とともに永遠を過ごすのです。そんなすばらしい約束が私たちに与えられている。しかもこれは神が思いついたのではなく、この世界を創造する前から「あらかじめ定められ」ていた。神はそのようなことも計画されていたのです。

私たちはきょうこの地上での生活が終わっても、確かに栄光の神とともに永遠を過ごすのです。栄光に招き入れられた者として、また招き入れられる者として、私たちは天国民とされたのです。神が言われるのは、では天国民としてそれにふさわしい者として今この地上を生きなさいということです。そのためには神が下さったこの知恵が必要なのです。神が私たちに下さったみことばというのが私たちを助けて、私たちを成長させていってくれるのです。

3) 人知を超えたもの 8-9節

三つ目に彼が言うのは、この「神の知恵」というのは我々の人知を遥かに超えたものだ。8-9節を見ると、「この知恵を、この世の支配者たちは、だれひとりとして悟りませんでした。もし悟っていたら、栄光の主を十字架につけはしなかったでしょう。」とあります。「悟りませんでした」——誰も理解しなかったのです。この世の支配者であろうと、この世の知恵があるとされる人であろうと、彼らは神のご計画を理解することができなかった。ですから8節が言うように、「栄光の主を十字架につけ」たと。もし人々が主イエス・キリストがなぜこの世にお見えになったのかを理解していたとしたら、全く違う扱いをしたらどうだろうと。人としてこの世にお見えになったイエス様が誰かみんなわからなかったのです。なぜイエス様が人となったのか、なぜみずから十字架に架かっていかれたのか誰もわからなかった。そのことを言うのです。イエス様が何をなさろうとしていたのか、なぜ十字架にかかったのか、イエス様が一体誰なのか——。誰もそのことを悟っていなかった。悲しいことにこの神様の知恵を人間はみずからの知恵で悟ることができないのです。

そのいい例がここに記されています。9節でパウロはある旧約のみことばを引用します。「まさしく、聖書に書いてあるとおりです。『目が見たことのないもの、耳が聞いたことのないもの、そして、人の心に思い浮かんだことのないもの。神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。』」と。確かにこのようにパウロは9節で記しているのですが、実はこれと同じことが記されている旧約聖書のみことばはないのです。恐らくイザヤ64:4ではないかと言うのですが、そこを見ても「神を待ち望む者のために、このようにしてくださる神は、あなた以外にとこしえから聞いたこともなく、耳にしたこともなく、目で見たこともありません。」とあり、全く同じではありません。でも恐らくパウロはこのみことばの大体の意味を使うことによって、「神の知恵」というのが私たちの理解を遥かに超えている、人知を超えているのだということを伝えたかったのだと思います。ですから私たちが「目が見たことのない

い」、「耳が聞いたことのない」、「心に思い浮かんだことのない」、「神の備えてくださったものは、みなそう」だと。パウロは、神様が明らかにしてくださった神の救いのご計画は私たちが考えつくことができないうことを教えたいのです。何千年にもわたって、罪人を赦すために神様がいけにえを教え、人々がいけにえを捧げ、自分の罪深さを悟らせ、でもいけにえによっては罪が完全に赦されることはない。そこで神は人々のうちに働いて、彼らが自分たちの罪を贖ってくれる完全ないけにえを待ち望むようにと。そしてそのいけにえが来たのです。なぜなら人間の中にはそのいけにえにふさわしい、罪の全くない完全な存在がいなかったからです。そしてその方を私たちの身代わりとして十字架につけて、この方を裁くことによって私たちに罪の赦しを与えるなんて、誰がそんなことを思いつきます？イエス様はみんなにとって大変役に立つような講話をするために、説教をするために来たのではないのです。イエス様はいのちを捨てるために来たのです。それしかあなたや私の罪が赦される術がなかったからです。ですからパウロは、神が私たちに示してくださった、この救いのご計画、一体誰がそんなことを思いつくことができるかと言うのです。確かに私たちの「目が見たことのない」、「耳が聞いたことのない」、「人の心に思い浮かんだことのない」、そのようなことを神が備えてくださったと。ローマ 11 : 33 「ああ、神の知恵と知識との富は、何と底知れず深いことでしょう。そのさばきは、何と知り尽くしがたく、その道は、何と測り知りがたいことでしょう。」、我々がどんなに頑張っても神のことをすべて知ることにはできないのです。それが神なのです。私たちとは違うのです。すべてを創造された方であり、知恵においてもすべてにおいて完璧なお方なのです。でもその方が私たちが知るべきことをこうして「啓示」をもって我々に示してくださった。それによって私たちはこの真理を少し理解することができたのです。

このすばらしい神の救いの話をパウロはするのですが、次に進む前に9節の終わりを見てください。「神を愛する者のために、神の備えてくださったものは、みなそうである。」とあります。神様が私たちに救いを備えてくださった、すばらしい祝福を下された。しかし、救いは終わりではなく始まりでしたよね。神とともに生きる人生が始まったのです。それがどんなにすばらしいのか、神様のすばらしい祝福を話すのですが、その時に「神の備えてくださったものは、みなそうである」と言うのです。そのひとつひとつを見て行く時に私たちは考えもしなかった、思いつきもしなかったと。でもおもしろいのはこれらはすべて「神を愛する者のために」備えられえていると。なぜなら救いにあずかった者たちは、神を愛する者たちだからです。救いを知らない皆さんというのは、イエス・キリストのことは知っているかもしれない。聖書の知識があるかもしれない。でも神を愛していないのです。それが救いにあずかっているかどうか、大きく見分けるところです。イエス・キリストの救いにあずかった者たちは、何者よりも神を愛する者たちです。もちろんいつも完全にそうやって愛するかということそうではないです。でもすべての者より、そして自分よりも神を愛する者たち。それがこの救いにあずかった者です。神を知らない人たちはどんなに知識があろうと、どんな経験をしていようと、この神に対する愛がないのです。神よりもほかのものを愛しています。ですからここでパウロがこのみことばを使って私たちに教えてくれるのは、神を愛する者たちに神はこんな祝福を備えてくださり、そしてこの神を愛することこそがこの救いにあずかった者たちの特徴なのだということです。

B. 聖霊により得た知恵 10-11節

さて、パウロたちがこの「神の知恵」をどのようにしていただいたのかを見ていきましょう。

1. 聖霊による啓示 10a節

パウロは10節「神はこれを、御霊によって私たちに啓示されたのです。」と言います。「御霊」、つまり神が聖霊なる神によってこれを私たちに与えてくださったと。「御霊によって私たちに啓示された」というのは、聖霊なる神様が媒体となって神の真理を私たちに明らかにしてくださったということです。神がどんなお方なのか、どんなことを愛しておられるのか、神がどんなことを憎んでおられるのか、人間はどこから来たのか、死んだ後どうなるのか、それもすべて神が明らかにしてくださった。このことは聖霊によって明らかにされたのだとパウロが言うのです。だから聖霊なる神様が働いてくださって、神様の真理を明らかにしてくださるなければ、我々はそのことを知ることはなかったのです。それが記されているのがこの聖書です。聖書についてもいろいろな人たちが人間が書いたのでしょうか、いろいろなことを言います。とんでもない、聖書は私たちにこれは聖霊なる神様によって与えられたものだとして教えています。聖書には約40人の人間が携わり、関わってはいますが、聖書の本当の著者は聖霊なる神様です。その方が私たちに真理を明らかにしてくださった。ですからおもしろいことに、古事記や日本書紀よりはるかに古い書物が今でも世界のベストセラーであり、聖書の中にまだ誰も間違いを見つけない。不思議でしょう？聖書の言うとおりに世界が動いています。聖書は人間の本質的な問題を明らかにしてくれます。ですから聖書を読んでいると、自分の心がそこに映し出されているように思います。なぜならあなたのすべてを知っておられる神がお書きになったものであり、この

聖書によって私たちは大切な真理——あなたを造った神を、神のすばらしい深遠なご計画を知るのです。

2. 聖霊の権能 10b 節

その上で10節後半「御霊はすべてのことを探り、神の深みにまで及ばれるからです。」とあります。パウロはここでこの「神の知恵」は聖霊なる神様によって与えられたのだと教えます。その話をした後、今度はこの聖霊なる神というのはどんな方なのかという話をします。ですからここには聖霊の権能が記されています。「すべてのことを探り」、これを見ると聖霊なる神がすべてのことを知るために、何かの情報を得るために一生懸命働いているように言う人もいます。でも聖霊はそんなことをする必要はないのです。「神の深みにまで及ばれる」、この「深み」というのはギリシャ語の辞書によれば「神の人知の及ばないご計画、その深さ」だと。我々がどうしても思いつくことのない、人知を遥かに超えたものだと。つまり聖霊なる神は神のご計画も含めてすべてのことを既にご存じだと、そういう存在だと言うのです。だからこそ神の真理を正確に伝えることができるのです。パウロが言いたいのはそういうことです。神のすべてのこと、人間が思いつかないようなこと、そのすべてのことを聖霊はご存じだと。

3. 聖霊の神性 11 節

そういう方なのだと教えた後、11節に今度はこの聖霊なる神様の神性、聖霊が神であることをまた強調します。「いったい、人の心のことは、その人のうちにある霊のほかには、だれが知っているでしょう。」、つまり私たちはお互いを見ている、その人の心の中の思いや考え、感情のすべてを知ることはありません。怒っているのかなあとか、喜んでいるのかなあとか、様子を見てある程度は想像できます。パウロは、「その人のうちにある霊」しかその人のことはわからないでしようと言っているのです。つまりその人しかその人の心にどんな思いがあるのか、どんな考えがあるのかはわからないと。確かにそうです。だからこの周知の事実をもってパウロは聖霊なる神の神性を教えようとするのです。人間の霊がそうであるように、神のみこころや神のお考え、神の思いや神の感情、そのすべてのことを神の御霊と言っているのです。つまり人間の霊がその人のすべてを知っているように、神の御霊は神のすべてを知っていると11節で言っているのです。「同じように、神のみこころのことは、神の御霊のほかにはだれも知りません。」と。聖霊は神だから神のことを知っている。神以外の者は神のすべてを知ることはないと。こうして聖霊なるお方が神だということを改めて教えます。

C. 聖霊によって理解する知恵 12-16 節

「神の知恵」、聖霊によって与えられ、その聖霊はどういうお方なのかを明らかにしたパウロ。12-16節を見ると、では我々はどうやってこの神の知恵を理解するのか——。パウロは聖霊なる神によってそれを理解するのだと教えています。

1. 内住する聖霊 12 節

12節で内住する聖霊の話をします。「ところで、私たちは、この世の霊を受けたのではなく、神の御霊を受けました。」と。パウロが強調するのは、私たちは神の霊をいただく者になったということです。ここで「この世の霊」というのはこの世を支配しているサタンのことなのか、悪霊のことなのか——。恐らくそういうことではなくて、この文脈から見れば、「この世の知恵」の話です。なぜかという、この後解釈の話をするのです。しかも「この世」ということばは「人間の」ということです。ですからパウロは、私たちは人間の知恵を受けたのではなくて、聖霊なる神様の御霊を受けた、そしてそれをいただいたからこういう働きができるのだと言うのです。まず最初にパウロが言ったように、私たちは御霊をいただいた。聖霊なる神様をいただいた人たち、聖霊なる神がその心に内住している人、その人がクリスチャンですよね。イエス様を信じて救いにあずかったら、神様が何をされるかということ、聖霊がその人のうちに住んでくださる。自分の住まいとしてそこにいてくださるということ。イエス様がヨハネの福音書の中でそのようなことを言われました。ヨハネ14:16「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がいつまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」、ずっといてくださるという話をした後、17節で「その方はあなたがたとともに住み、あなたがたのうちに住まれるからです。」と教えます。ですからみことばは救いにあずかったあなたとともに聖霊がいてくださることを教えます。私たちは神の御霊をいただき、聖霊が私たちのうちに内住するのだと。

2. 聖霊内住の目的 12-13 節

1) 救いのため

12節からその目的を教えます。「それは」という接続詞が出て来ます。理由を説明するのです。「恵みによって神から私たちに賜わったものを、私たちが知るためです。」と、まず一つ目に私たちが聖霊をいただいたのは救いのためです。聖霊をいただいた人が救われている。

2) 神の祝福を知るため 12 節

二つ目に12節にあるように、神様の祝福を知るためです。「恵みによって神から私たちに賜わったものを」と、新改訳の第二版では特に「恵みによって」という原語にはないことばが補足されています。このことばを補足した理由は、神から私たちが賜ったものは全部恵みだからです。あえてそこでそのことばを加えているのですが、神様から私たちに一方的に与えられたもの——まず言えるのは私たちの救いです。そしてみことばが我々に教えるようにどんな時でも神が我々とともにいてくださる。この神が私たちを助けてくださる。導いてくださる。みこころを教えてください。私たちは決してひとりぼっちではない。いつも神がともにいてくださると。挙げていけば切りがないのですが、こういう神様が一方的な恵みによって私たちに与えられた祝福を我々が知るために聖霊が与えられている。聖霊なる神様はみことばを通して教えてください。聖霊がみことばを与え、聖霊がそのみことばの理解を助けてくれるのです。だから私たちがみことばを学ぶ時に、神様が下さった約束をみことばを通して教えられていくのです。

皆さんもよくわかるように、そのことを知る時に私たちの信仰は強められていくのです。あなたよりもあなたの弱さ、愚かさを知っている神が、あなたがこの地上にあってちゃんと信仰生活を歩み、栄光を現すために必要なものを全部備えてくれたからです。そのように神が言われているのに、残念なことに私たちはまだそのことをよくわかっていない。だから与えられた祝福がどんなに素晴らしいかがまだわかっていないのです。全く落ち度のない、全く失敗を犯さない神。なさることは常に完璧だから神様がごめんなさいと謝ることはないのです。あなたが自分の弱さを説明する必要はない。それは全部分かった上で神は必要なものをちゃんと備えてくれているのです。我々にとって必要なことはそれを知ることです。その時に私たちは本当に神によって救われたことを喜ぶのです。こんな方が私の神であることを喜ぶのです。ですからこの神の祝福を知るために神様は我々に聖霊を下さった。

3) 神の祝福を伝えるため 13節

三つ目に言えることは、神の祝福を伝えるためにです。13節に「この賜物について話すには、人の知恵に教えられたことばを用いず、御霊に教えられたことばを用います。」と出てきます。つまり聖霊なる神様は私たちに神の真理をしっかりと理解するための知恵を下さる、その助けを下さる。それだけではなくて私たちが語る時にも助けを下さるということです。ですから私たちが語る時には「御霊のことばをもって御霊のことを解く」と。例えばマルコ13章の中で、私たちが経験することはないでしょうけれども、信仰ゆえに議会に引き渡され、会堂で鞭打たれたり、主イエス・キリストのために総督や王たちの前に立たされて裁かれる時があることを教えてください。マルコ13:11「彼らに捕えられ、引き渡されたとき、何と言おうかなどと案じるには及びません。ただ、そのとき自分に示されることを、話しなさい。話すのはあなたがたではなく、聖霊です。」とあります。つまり聖霊なる神は私たちが語るべきことばも下さると。その時に私たちは神のみわざを見るのです。

ですからパウロは聖霊なる神様が私たちに働いてくださって、我々をただ救うだけではない。私たちに与えられた祝福をただ私たちが知るだけではない。実際に私たちがこの祝福を語る時にも聖霊なる神様が働いてくださるのだと教えます。この13節の「御霊のことばをもって御霊のことを解く」の「解く」ということばは「解釈する」とか「説明する」という意味です。我々が神のことを人々に説明するためには神のことばが必要なのです。なぜなら神が与えてくださったみことばを私たちが人々に伝える時に、聖霊なる神様はそれを用いて人々に神のみこころを教えてください。信仰者の皆さん、私たちは神に助けをいただきながら、求めながら神の真理を語る時に、神はその真理を人々の中に明らかにしてください。御霊のことばをもって御霊のことを説明する。だから私たちは神のことばを、神の助けをいただきながら正しく語り続けていくことが必要なのです。

3. 聖霊による理解 14-16節

そして最後に、理解の話をしています。14節に「生まれながらの人間は、神の御霊に属することを受け入れません。それらは彼には愚かなことだからです。」とあります。

1) 救いを拒む人間の二つの特徴 14節

(1) 「神の御霊に属することを受け入れません」

まず最初にパウロは救いを拒んでいる人々の二つの特徴を明らかにします。そういう人がこの中にもおられるかもしれない。「生まれながらの人間」と書いてあります。これは霊的でなくて肉体的な生来（生まれつきの）人間です。どういう人かというユダ19節で「この人たちは、御霊を持たず、分裂を起こし、生まれつきのままの人間です。」と言います。聖霊なる神様を得ていないのです。彼らはいろいろな争いを起こす、まさに「生まれつきのままの人間」だと。ですからこの14節にあるように、生まれながら神を拒み続けている人の特徴は、「神の御霊に属することを受け入れ」ない。「神の御霊に属すること」、この箇所は神の御霊に関する事柄を受け入れないという意味です。「御霊に属する」と日本語で訳していますが、ここは「神様の御霊に関する事柄」を受け入れないと。「属する」ということばは原

語の中にはなく補われています。つまり、救いを拒んでいる人たちというのは、聖霊に関することも、神に関するすべての事柄を受け入れようとしない。「受け入れ」というのは「迎え入れる」という意味のあることばで、結論を言うと、生まれつきの人間というのは神の御霊に関する真理を受け入れることをしない。それを歓迎しないということです。

神がどんなにすばらしいと聞いても人々はそう思わないのです。罪の赦しがあるのだと聞いてもそれを歓迎しないのです。今神に逆らい続けている人はこの瞬間永遠の地獄に向かっているのに、神が私たちに救いを示してくださったのに、救いの機会があることがわかって、それでも人々はそれを歓迎しないと。理由が書いてあります。「それらは彼には愚かなことだ」と。そういうふうにはしか見えないのです。イエス様の救いと聞いてもばからしい、自分には必要ではないと。だから歓迎しないのです。しかも気づいていただきたいのは、これはその人個人の選択だということです。その人が受け入れないのです。誰かのせいではないのです。この世でどんなに知恵があると言われても、生まれつきの人はこのすばらしい神の真理を聞いても受け入れようとしない。愚かなことにしか見えません。

(2) 「悟ることができません」

二つ目に「それを悟ることができません。」と書いてあります。つまり今見てきたように、どんなにすばらしいと話しても理解できないということです。「なぜなら」と続きます。「御霊のことは御霊によってわかまえるものだからです。」とあります。この「わかまえる」というのは新約聖書の中に16回出てくるのですが、その中の10回はパウロ書簡（パウロが書いた手紙）に出てきます。そのすべてが1コリントに出てきます。これは「判断する」とか「吟味する」、「評価する」という意味です。つまりパウロが言っているのは聖霊の助けがなければこの「神の知恵」が真実かどうか判断がつかないということです。神のメッセージを何度聞いても彼らはそれが真実かどうか判断がつかないのです。しっかりと正しい判断をするためには、聖霊なる神様ご自身の助けが不可欠なのです。多くの人たちが既に人間の知恵に頼って生きていたのです。人間の知恵によってはその真理を知ることにはならないのです。

2) 救いを受け入れた人の特徴 15-16節

(1) すべてをわかまえる 15節

そして救いを受け入れた人々の話が最後に出てきます。15節「御霊を受けている人は、すべてのことをわかまえますが、自分はだれによってもわかまえられません。」、先ほど14節で神の救いを拒んでいる人のことを見てきました。それと相反する存在、救いを受け入れた人はすべてをわかまえると言うのです。つまり神の真理をちゃんと理解し判断できる人です。なぜかというと、聖霊なる神がその人のうちにいるからです。その方の聖霊なる働きによってわかまえることができると。ですからイエス様を信じた私たちは、何が神の前に正しいのか、正しくないのか、ある程度判断がつかます。間違ったことをすると、それは違ふと必ず神様が教えてくださるからです。

(2) 神の評価にのみ関心 15節

続いて「自分はだれによってもわかまえられません」とあります。この箇所が私たちに教えているのは、この救いにあずかった人たちはすべてのことをわかまえるだけではなくて、神様の評価にのみ関心があるということです。人々がどんなことを言おうが関係ないのです。神の救いを拒んでいる人たちは、神に対しても何が正しいのかわかりませんでした。彼らは聖書のみことばを見ても愚かなこととしか見えないのです。だとしたら信仰者であるあなたを彼らは奇異の目で見るのです。この人は変わってるわ、ちょっとヘンやわと。なぜならあなたが神様のみことばに忠実であろうとすればするほど、世の中から見たらヘンな存在、変わった存在だからです。パウロはそのことをちゃんとわかっているのです。「自分はだれによってもわかまえられ」ない。人々はいろいろなことをもってあなたを間違っって評価するでしょう。自分勝手な評価を下すのです。でもクリスチャンは本当の評価をする人は神だということを知っているのです。1コリント4：4に「私をさばく方は主です。」とパウロが言っています。ですから人々がどんなひどいことを言おうと、間違っった評価をしようと、それはどうでもいいのです。私たちが思っているのは神がどう評価するかです。それを見ながら生きています。人間の評価ではなくて神の評価だけに関心があるのです。

(3) キリストの心がある 16節

最後16節に、パウロはイザヤ40：13のみことばを引用します。「いったい、『だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか。』ところが、私たちに、キリストの心があるのです。」、こうして神の真理を理解できず、また何が真実なのか判断がつかない生まれつきの神に反する人々に対して彼らの行い、考えや選択がいかに神のみこころに反しているのかを教えていくのです。「いったい、『だれが主のみこころを知り、主を導くことができたか』、答えは明白です。誰もいないのです。この世の人の中で一体何が神のみこころなのか、知恵を与えて神を導くことができるような、神より知恵のあるような人がど

ここにいるのか——。どこにもいない。神の知恵をばかにしている人たちに対して一体あなたたちは何者なのかと。

でもパウロはこう言うのです。「ところが、私たちには、**キリストの心があるのです**」と。このように神を信じない、逆らっている人たちと救いにあずかった者たちとを対比するのです。聖霊をいただいている者たちに神のこと、神のみこころ、神の深遠な知恵を理解することはできない。でも、我々信仰者はそれができると言うのです。この「**キリストの心**」と訳されている「心」は「判断」、また「思い」ということばです。いろいろなことを思うということばです。つまりキリストの思いが、キリストの判断が我々クリスチャンの思いであり、私たちの判断だと言っているのです。これまで自分勝手な思いを持ってきた私たちがキリストの思いと変えられていくのです。私たちはキリストが望んでいることを知りたいと思うし、またそれを知って行いたいと思います。キリストが喜ばれることを私たちは知って、それをともに喜ぶ者になった。同時にキリストが憎まれることを私も同じように憎む者となっていく。つまりこうして成長とともに私たちの思いや判断がまさにキリストに似たものへと変えられていくという話です。キリストの思いが私の思いになる。キリストの判断が私の判断となる。そういう人へと私たちは生まれ変わったのです。そういう人へと私たちは成長するのです。ですから、みことばが教えるように私たちは主イエス・キリストに似た者へ日々変えられていくのです。

パウロが私のうちには神の思いがあると云います。だから私は神のみこころを知ることができる。神が喜ばれることを知ることができる。レオン・モリスという先生がこう云います。「御霊の人はこの世の見方で物を見ることをしない。キリストの見方で見るのである。なぜならキリストの思いが私たちの思いだから。」と。信仰者の皆さん、神様は私たちにこの神のすばらしい真理を与えてくださった。このみことばを下された。このことによって私たちは神を知ることができるのです。そして感謝なことに、どんなに鈍い私たちでもこの神の真理を知ることができるように、ちゃんと聖霊を下された。こうして私たちは神の真理を知り、神のみこころを知り、そのみこころに従って今日を生きることができるのです。何のために？この神こそがまことの神であることを証しするためです。この神こそが私たちをお造りになったまことの神であることを明らかにするためです。だから神はあなたを変え続けることによって、あなたを通して、あなたを救いあなたを変えてくださっている神を明らかにしてください。こんな祝福にあずかったのです。こんなどうしようもない私たちをご自身の栄光のために神は使ってください。このみことばを通して、そのことを私たちはより深く知っていくのです。そのことによって私たちはますます神を感謝する者に、この方を誇る者へと成長するためです。どうか主の恵みをしっかりと覚えながら、この神様を誇りながら新しい一週間それぞれのところで主のすばらしさを証ししてください。